

開催

白鳥文明 作品展

八幡生涯
学習のむら

周防大島町の彫刻家・白鳥文明氏の作品展を開催中です。

白鳥氏は、日前（ひくま）の莊嚴寺の住職を務めながら彫刻家としても活動されてきました。彫刻のみならず、絵画、陶芸と幅広く創作を続けられ、各地で展覧会を開催されるなど精力的に作品を発表されています。作品には親鸞聖人をテーマとしたものも多く、本願寺山口別院にも所蔵されて



います。同時に、周防大島の土をいかした陶芸作品や島の特産品であるみかんの灰を釉薬（うわぐすり）として使った新しい素材を試しての作品制作にも取り組まれています。

【見どころ1】 見る人を楽しませる遊び心
さりげなく野に咲く草花たち。自己主張



は強くないけれどやさしく、かわいらしく人の目を楽しませてくれます。そんな草花たちを描いた作品をよく見ると蝶やカタツムリといった小さな生き物がそっと隠れています。さあ、あなたはいくつ見つけられるでしょうか？ぜひ会場で探してみてください。

【見どころ2】 なむでん踊りの実盛人形（デコ）を特別展示

今年には久賀に伝わる山口県指定民俗文化財・なむでん踊りが2015年に復活して10年目になります。なむでん踊り保存会では周防大島の貴重な文化財であるなむでん踊りの子どもたちへの伝承にも力を入れています。長年の使用で道具類に傷みが目立っていました。特に、主役ともいえる実盛人形の新調は課題となっていました。そこで白鳥氏に相談したところ協力を快諾され、大人用と子ども用それぞれ1体ずつの

人形を作成いただきました。人形に合う着物の作成には安下庄の方がご協力くださいました。なんと90歳になる方で、これまでの経験をいかし、細部にわたって工夫いただきました。人形の一体は実盛が錦の直垂（ひたたれ）を着用し最期の合戦と覚悟して篠原の合戦に赴いたという平家物語の記述にちなみ、赤い金襴の着物を着ています。今回の作品展では、この実盛人形を特別に展示いたします。いつもはなむでん踊りの時にしか見ることのできない人形です。町の人たちの協力で新調された実盛人形は必見です。（古賀瑞枝）

【期間】 7月9日（火）～9月16日（月）

※休館日：月曜、祝日の場合はその翌日

◎ギャラリートーク 8月25日（日）11時～

【場所】 八幡生涯学習のむら 学びの間

【観覧料】 無料

【問合せ】 0820・72・2601



日系四世の情熱



日本ハワイ移民資料館

当館は大正15（1926）年に建てられた旧福元邸を活用している施設です。福元氏はアメリカ本土への出稼ぎで財をなした人で日本に帰って故郷に家建てました。館には二階建ての土蔵があります。一階部分をシアタールームとして活用しており、映像をご覧いただけるよう座席15人分を配しています。



ここでは「海を渡った日本人」と題して、明治時代にはじまったハワイ移民の発端から渡航、現地での生活など、ハワイでの苦勞と適合していく歴史を写真資料・現地ロケ映像・インタビューを織り込みわかりやすく解説した12分間のビデオを上映し

ています。これは平成11（1999）年の開館の目玉として制作されたものです。

このビデオの中で四世として紹介されている女性が、今年の秋、はじめて来館されました。そのとき受付をした館長は、一目で彼女だと分り感動の対面となりました。連絡をとり、周防大島に住む親戚の方が駆けつけてくれ、彼女はお墓参りをする事が出来ました。

彼女の曾祖父父母は周防大島の旧屋代村出身で、明治時代にハワイ移民として当地へと移り住みました。ハワイ生まれの祖父は3歳の時に一家で帰国、日本で教育を受け、16歳の時に再度ハワイへ渡りました。戦後、ハワイの山口県人会で色々な活動をされた方になります。今回、彼女は周防大島の先祖をたどって来日されたのでした。

数日後、次の様なお礼の手紙が届きました。

「私の先祖を見つけるお手伝いをして頂き、ありがとうございます。ビデオの中で、25年ぶりに聞いた祖父の声に圧倒されてしまいました。突然の訪問にもかかわらず、親戚の



方に連絡して頂き、お墓参りが出来たのは想定外の大きな喜びでした」

そして、今年5月に、弟と姪を連れて3人で来館されました。今回は先祖の記録を完成させたいという強い希望で、沢山の資料を持参して親戚の方に尋ねていました。今後も連絡を取り合いながら、家族の歴史を完成させるそうです。今回は「弟と姪に周防大島と先祖のお墓を見せる事が出来て大満足です」と言っ

頂きました。

周防大島の親戚の方は、昭和39（1964）年にカウアイ島と大島郡の姉妹島提携を結んだ時の交流事業として行われた、カウアイ島での第1回サマースクールに参加した女性です。時を経てむすびつきがさらに深まり、ハワイとは縁の深い絆を感じます。

今年はコロナ禍前と同じようにハワイをはじめとした海外からの来館者で賑わいを取り戻しつつあります。今回のことは日本で生まれ、日本で生活している私たちには分からない、日系の方々の先祖に対する情熱を強く感じた一日でした。

（砂田信子）



活動紹介

東和卓球クラブ

町館 島育 防合 周総

いつまでも元気に健康でいたい。卓球を始めて友達を作りたい。健康のためにできる趣味を探している。日頃の運動不足を解消したい方。そんな皆さん、気軽にはじめられる卓球で、楽しく体を動かしませんか？今回は週2回当施設にて活動されている東和卓球クラブの紹介です。終始わいわいと和やかに活動をされている皆様。代表の金子さんにお話を伺いました。



「どのような目的でされていますか？」

「息抜きや健康のためにやっています。声を出して卓球をするとストレス発散にもなります」

「どのような雰囲気ですか？」

「試合が目標のクラブではないので皆さん卓球を楽しみながら汗を流しています。休憩時間には和気あいあいと交流しています」

「練習方法は？」

「試合は行わずにメンバーを交代しながらラリーを楽しんでいます。素人の方も大歓迎ですので気楽にきてください」

「このように、楽しく卓球をしたい方に人気の教室です。お一人でも気軽に参加でき楽しむことができます。見学、教室参加、随時受付中です。初心者の方も大歓迎です。詳細は当館へお問い合わせください。」

●東和卓球クラブの活動

【場所】総合体育館アリーナ

【日時】火曜日18時半～20時半

金曜日13時半～15時半

【問合せ】0820・78・2512
※年齢・性別・経験の有無は問いません。ラケット・球も貸し出しいたします



大島中学校講師

宮本第一記念館

7月2日、大島中学校の総合的な学習の時間で宮本第一を取り上げた授業の講師を担当しました。授業の目標として、持続可能な周防大島町を実現するためのアイデアを提言しようということ、まず観光と観光地としての周防大島が取り上げられることになりました。

宮本は戦後の高度成長期にも地域の実情を見聞しています。成長によって生まれた日本人の余暇の過ごし方として、よりよい観光のありよ

うを追求しています。ツアーやガイドブックなどにたよった物見遊山の旅行は本来の旅と違って学びが少ないこと、正月やお盆に集中する日本人の休暇の取り方の閉そく性などを指摘しています。また近年成功した観光の事例の映像を見ながら、周防大島のことについて考えてもらう時間となりました。日常的にあつて地元の人には認識されない地方のよさを「再発見」することが大きなキーワードでした。

熱心にメモをしたり、話にうなずいてくれる生徒が印象に残りましたが、高度成長期と現在とを単純には比較できません。情報ツールの充実した現代では旅のあり方も一様ではないと思います。学習を通して皆さんのよい学びの機会となれば幸いです。(徳毛敦洋)



SDGs
2030年までに持続可能なよりよい世界を目指す国際目標
SDGsの「地方創生の動向」として、「地方での経済は日本の大きな特徴」としている
宮本第一は、SDGsの理念が込められた緑の地域社会のあり方について調査しています。

彫刻家

はやし たけし
林健展

久賀出身の彫刻家・林健(1908～2002)は、呉市・音戸の瀬戸公園に建つ「平清盛公日招(ひまねき)像」などの作者として知られています。



【久賀庁舎前の《青空》像を制作中の林健】

長州大工の流れを汲む同郷の仏師・門井耕雲から仏像彫刻を学んだ林は、その後、彫刻家の長谷川栄作に師事し、帝展や日展などの美術展で活躍しました。また、生涯の大半を過ごした広島県内に、数多くの屋外彫刻を遺しました。

このたびの展覧会では、旧久賀町時代から所蔵している作品のほか、新たに遺族や関係者からご寄贈いただいた作品や資料も展示します。ま

た、仏像彫刻の影響を受けながら、みずからの作風を模索し続けた林の生涯と仕事を、パネル展示でご紹介します。

なお、この展覧会は、宮本常一記念館のボランティアである地域交流員の方が中心となって開催します。展覧会の経費には、関係者である京都府在住の元岡みどりさんからの寄付が充てられます。

皆様、是非ご来場ください。

【期間】9月3日(火)～16日(月)

※9月9日(月)は休館

【時間】午前9時～午後5時

※入場は午後4時まで

【場所】八幡生涯学習のむら商いの間

【観覧料】無料

【問合せ】宮本常一記念館

0820・78・2514

※開催場所と問い合わせ先が異なりますので、ご注意ください。

宮本常一

絵画資料



宮本常一記念館では、周防大島出身の民俗学者・宮本常一ゆかりの資料を保管し、展示しています。その

なかには宮本が描いた絵画資料も含まれます。今回はその紹介をします。

この絵画は、宮本が生まれ育った長崎周辺を描いたもので、タイトルは「新宮全景」となっています。大正7(1918)年、彼が11歳の頃の作品です。右上隅に朱書きで「10」とあるのは、

先生がつけた点数でしようか。宮本は「我が半生の記録」という自叙伝のなかで、西方尋常高等小学校に通っていた頃、「読者が乙だったので父に叱られた。読方はあまりすきでなかった。一番すきなのは絵で、学科に絵はなかったが、よく書いた」と記しています

(『父母の記/自伝抄』(宮本常一著作集42)、未来社、2002年刊)。



新宮島(真宮島とも)は、オキシングウ・カチシングウと呼ばれる二島からなり、潮が引くとオキシングウまで歩いて渡ることができました。絵画の左に見える三角形の島が

オキシングウです。よく見ると斜面には段々畑と思しきものが描かれています。当時ここには桑畑があり、

後にはミカン畑がつけられました。絵画の右に見える平坦な島はカチシングウです。ここには明治32(1899)年に建設された波止があり

ます。その付近に見える建物はイリコ小屋です。昭和17(1942)年頃まで、この小屋でイワシを加工していました。

オキシングウの背後には浮島が見えます。その左には島が2つ並んでいます。乙小島と中小島だと思いますが、その後、これら島は鉄道の線路に敷くバラスを採るために削り取られ、今見ると島の形が変わっています。

ほかに宮本の絵画には写実的なものが多く、当時の周辺植生や地形、土地利用の様子などをうかがうことができます。絵画資料は、写真にも劣らない地域の歴史的な資料といえるでしょう。(板垣優河)